

赤い靴伝説

横浜物語

阿木燿子

Aki Yoko



赤い靴伝説

横浜物語

阿木燿子

Aki Yoko

集英社

初出誌

中華街

外人墓地

ニューグランドホテルで朝食を

港町シャンソン

本牧「プッシー・キャット」

赤い靴伝説

ヨコハマ・ドリーム

ベース・キャンプ・ブルース

「小説すばる」'90・春季号

「小説すばる」'90・11月号

「小説すばる」'90・12月号

「小説すばる」'91・1月号

「小説すばる」'91・2月号

「小説すばる」'91・3月号

「小説すばる」'91・4月号

「小説すばる」'91・5月号

JASRAC 出9551753・501

日本基督教団讃美歌委員会著作権使用許諾第1938号

あか
くつでんせつ
赤い靴伝説

よこはまものがたり
横浜物語

一九九五年 七月三〇日 第一刷発行

著者 **あき
ようこ
阿木燿子**

発行者 **若菜 正**

発行所 **株式会社 集英社**

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一―一五〇

編集部 (〇三) 三二三〇―六一〇〇
電話 販売部 (〇三) 三二三〇―六三九三
制作部 (〇三) 三二三〇―六〇八〇

印刷製本所 **凸版印刷株式会社**

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1995 Y. AKI Printed in Japan
ISBN4-08-774153-2 C0093

赤い靴伝説

横浜物語

目次

中華街

7

外人墓地

29

ニューグランドホテルで朝食を

53

港町シャンソン

79

本牧「プッシー・キャット」

107

赤い靴伝説

137

ヨコハマ・ドリーム

165

ベース・キャンプ・ブルース

195

装 装
画／福山小夜
丁／岡 邦彦

赤
い
靴
伝
説

横
浜
物
語

中
華
街

ウィンドウの中にはクリスマスツリーのモールみたい、腸詰めがぶら下っていた。赤と黒のまだらな斑点が不気味だ。今にも切れそうな蛍光灯の下で、腸詰めは内部から滲みでた脂で、表面が濡れて見える。

その横には豚の頭が並べられている。鼻と耳をそいで、魚の干もののように平らに開いているから、出来損ないの猪八戒ちよはつかいのお面みたいだ。

いつもの習慣で少女は、窓硝子に顔をくっつけてみる。鼻がペチャンコに潰れると、自分が「お面」とそっくりになったようで可笑しい。これが牛や羊だったら、可哀想に、と同情するのに、豚だとして笑えるのかしら、と少女は不思議に思う。その下に置かれたステンレスのバットの中には豚の耳、鼻、内臓などがきちんと区分けして、並べられている。

蜘蛛の巣状に罅割れた個所をセロテープで雑に補修したウィンドウに、向いの店のネオンが映り込んでいる。

——正華飯店——

ネオン管が壊れて、正の字の上の横棒が一本、消えている。

だから「止華飯店」。

少女がウインドウを叩く。文字が微かに揺れる。

窓際にいた男が振り向いた。この店の主人だ。白髪頭に小さなドンブリみたいな帽子を乗せている。肉饅頭を蒸している蒸籠せいろうから、美味しそうに湯気が立ち昇っている。

少女は声を掛ける代りに、背伸びをして、親指を顔の前に立ててみせる。決して上品とは言えないこんな仕草も、少女がやると可愛らしい。

湯気の中で白髪頭が頷いて、GI気取りで「カモン」のサインを返してくる。少女は唇を窄めて、投げキッスを送る。

表通りから左に曲って、また左。路地のそのまた路地の突き当たり。曲るたびごとに道幅が狭くなり、最後は体を横にして、やっと通れる広さしかない。

ブリキのバケツに躓つまずいた。乾いた音を周囲にばら撒き、中の生ゴミが散らばった。

靴が脱げそうになる。

何でこんな所に置くのよお、と少女が呟く。

靴は赤いサブリナシューズ。オードリー・ヘップバーンが「麗しのサブリナ」で履いていた例のヤツだ（少女は大のオードリーファンで、流行る前にいち早く買った）。

クズ野菜の腐臭が鼻をつく。青菜が腐ると、ドブみたいな嫌な匂いがする。キャベツの芯を踏んだ。

足許からグニョツとした感触が伝わってくる。まるで死体を踏んだみたいで、気持ちが悪い。
チエツ。少女は忌々し気に舌打ちをする。

湯気がもうもうと立ち昇っていた。水蒸気で、よく体がふやけないと思うくらいだ。

厨房にはコックが三人いて、忙しそうに働いている。

中華鍋の焼ける音がする。その音はギターの出鱈目なアドリブみたいに響く。
勝手口にもたれかかる。

湯気と音の間に割り込んで、ねーえ、と声を掛ける。

少年は餃子を作っていた。右手でヘラを握り、具を適量、左手の皮の上に乗せてゆく単純作業。

あとはマジシャンのような素早さで、皮に三本、"ダーツ"を寄せて、三日月型にしてゆく。

少年がなかなか顔を上げないので、少女は暫く少年の手許を見詰めている。

ずいぶん上達したな、と思う。ルバシカ風な白い上っぱりも似合ってきた。胸の真ん中の赤黒い染みは、鶏の首を絞めた時のものかしら、とぼんやり考えている。

強引に呼び出し、路地でキスをした。でも、すぐに体を離して、少年をしげしげと見る。

奥二重の切れ長の目。俯き加減になると、ナイフですーっと切ったように、瞼に綺麗な線が一本入る。

少女はその上を指でなぞる。少女のお気に入りのライン。目尻まで触れて、手を離す。そして、耳

元に唇を寄せる。

お店が終ったら、いつものところで待ってて。

今日は遅番だから……。

少年の返事ははっきりしない。それを遮って囁きかける。

分ってる、いいの、遅くても。

少女は、少年の汗ばんだ頬に一筋、爪跡をつける真似をして駆け出してゆく。ついでに、さっきのブリキのバケツをもう一度、蹴飛ばして。

細い路地を今度は右に二度曲って、大通りにでる。

後ろで爆竹の音が響いた。きつと何処かの店で結婚式があつたのだ。賑やかな声がある。でも、何を喋っているのか、チンブンカンブンだ。早口になると中国語は小鳥の囀りさえずのようで、少女の耳にはピーチクパーチクとしか聞こえない。

街が桃色に染まる頃。早春の夕暮れは華やいで、ネオンが点ると一層、通りが活気づく。

人通りが急に増えたようだ。もうじき夕食時。ディナータイム

中華街全体が巨大なレストランとなり、美味しそうな匂いに満ちる時刻。

前方から来た家族連れにぶつかりそうになる。

綿花のような白いセーターを着た女の子が、母親らしい女性に手を引かれている。

女の子が立ち止って、泣き出した。ウインドウの「飾り」を見て驚いたらしい。その店では豚では

なく、鳥の骨と焼き鴨をぶら下げている。

母親が一生懸命、あやしている。子供はちっとも泣き止まない。

少女は一瞥を与えると、甘ったれるんじゃないよ、このガキ、と唾を吐くように呟く。

東門まで少女は駆ける。少年と約束した時間まで二時間ある。もう一稼ぎしようと思う。最近はこの街も不景気で、時間に遅れると仕事にあぶれてしまう。

大棧橋には珍しくギリシャの大型船が停泊していた。

マストに青と白の国旗、船体の真ん中にGREECEの文字が見える。

甲板では男達が騒いでいる。きつと久し振りの陸地なので、伊勢佐木町あたりで羽を伸してきたのだろう。みんな、酔っているらしく、何やら調子外れの歌をがなっている。

少女は小石を拾って、海に投げる。午後に味わった、嫌な気分も一緒に放るつもりで……。

“仕事”は相当、キツかった。縛るのが好きなネイビーのお陰で、体の節々がまだ痛む。

船員達がこちらに気付いて、盛んに手を振っている。風に乗って、声が届く。意味は分からないが、多分、卑猥なスラング。その証拠に誰かが一言、怒鳴るたびに、下品な笑いの渦が沸き上る。

どんな時だって馬鹿にされたら、仕返しをするのが少女のやり方だ。粗野な男達を揶揄^{から}ってやりたくなった。少女はペティコートでたっぷり膨んだフレアースカートを、闘牛士のマントのように捌^きいてみせる。白い木綿のパンティをチラつかせながら。

男達が手摺りから身を乗りだして、口々に喚きだす。多分、もっとスカートを捲まぐれと言ってるのだ。少女は、馬鹿、助平、と大声で怒鳴る。

口笛が聞こえてきた。

春の夜が揺れる。

音痴は口笛を吹いても音痴なんだ、と少女は妙なところで感心する。

調子外れのあの音色は、少年に違いない。曲はお得意の「エデンの東」。

少女に連れが来たと分って、甲板の男達は白けたらしい。三々五々散って、誰も居なくなつた。

黒い海面に満月が映っていた。重油を流し込んだような、ねっとりとした波が塵芥ごみを運ぶ。

プラスチックのボトルが二個、海面に浮いている。板切れやぼろ布が岸壁近くで、行ったり来たりしている。

今夜は鷗かもめの死骸は見当らない。

それだけでも、ましな夜。

さっきのキス、先輩に見られちゃってさ。

先輩って？

ほら、いつも俺の横にいる、背の低い……。